

〈研究ノート〉

幼稚園における物とのかかわり・ 数量や文字とのかかわり

矢 治 夕 起

（2016年11月3日受理）

要 旨

幼稚園・保育所等の就学前の教育と小学校の教育の円滑な接続を図るために就学前から小学校低学年までを「接続期」ととらえ、「接続期の教育」という観点から、小学校では生活科を中核とした「スタートカリキュラム」の導入も進められている。就学前教育で生活科と関連の深いのは領域「環境」であるが、保育の現場においては保育の環境構成などを通して、小学校始期の学びにつながる様々な取り組み行われている。公立M幼稚園においては領域「環境」の物とのかかわり、数量や文字とのかかわりなどに関して、幼稚園教育要領、幼稚園教育要領解説に忠実に、子どもたちが身の回りの物に関心をもって深くかかわれるような環境や、体験を通して数量や文字に関心をもてるような配慮がなされていた。

キーワード 生活科、領域「環境」、物とのかかわり、数量とのかかわり、
文字とのかかわり

1. はじめに

緩やかな時間の流れの中で、幼児が環境に主体的にかかわり、自発的な活動である遊びを通しての学びを中心としている幼稚園・保育所等の就学前保育施設での生活から、校時に従い教科ごとの教科書を使用した一斉指導による教授・学習を中心とする小学校での生活への移行に戸惑う幼児は少なくない。スムーズに小学校生活に適應することが難しい子どもたちが授業中立ち歩く、教室から出て行くなど学級全体の授業が成立しなくなる「小1プロブレム」と呼ばれる現象が社会問題になって既に20年近くが経過している。そのため、近年、就学前から小学校低学年までを「接続期」ととらえ、「接続期の教育」という観点から様々な取り組みが行われるようになってきている。

小学校における「接続期の教育」の中核を担うのが、生活科である。生活科は1989（平成元）年の小学校学習指導要領の改訂で、理科と社会を廃して新たに設けられた。しかし、理科と社会の単なる「合科」ではなく、「小学校教育において低学年児童が主体的に取り組

める学習活動の場を保障すること」¹⁾を主眼とし、設置当初から幼児期の遊びを中心とした生活経験を踏まえた、体験的な学習を通して総合的な指導をすることが期待されていた。2008（平成20）年の『小学校学習指導要領解説 生活編』では「例えば、4月の最初の単元では、学校を探検する生活科の学習活動を中核として、国語科、音楽科、図画工作科などの内容を合科的に扱い大きな単元を構成することが考えられる。こうした単元では、児童が自らの思いや願いの実現に向けた活動を、ゆっくりとした時間の中で進めていくことが可能となる。大単元から徐々に各教科に分化していくスタートカリキュラムの編成なども効果的である。」²⁾と入学始期の指導計画に関して「スタートカリキュラム」という用語が明記されるようになった。幼保等から小学校へのスムーズな移行のための幼保小の連携は今後も更に進められることになるであろうが、中核としての生活科の重要性も増していくものと思われる。

「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」³⁾ことを目標とする生活科と、幼児教育において最も関係が深いのは「周囲の様々な環境に好奇心をもってかかわり、それらを生活の中に取り入れていこうとする力を養う。」⁴⁾ことをめざす領域「環境」である。本論では幼稚園における領域「環境」の中から、小学校始期の学びにつながる物や数量・文字に関する保育者の環境構成の配慮等について、具体的な事例を挙げて検討していきたい。

今回は筆者が2009年度から2012年度まで幼稚園評議員として関わった千葉県 I 市立M幼稚園における保育室・園舎内の物や数量・文字にかかわる保育者の環境構成への配慮等を取り上げたい。写真は2012（平成24）年6月、評議員として通常保育中の自由遊びの様子を観察した際に撮影したものである。

〔千葉県 I 市立M幼稚園の概要〕

- ・ I 市南部に位置する I 市内最大定員をもつ公立幼稚園。
- ・「自分で考え判断し、自分で行動する子どもの育成」を通して、「元気で明るい子」「温かい心をもつやさしい子」「よく考える子」の3つ教育目標の達成を目指している。
- ・自由遊びを重視した保育を実践している。
- ・1日の流れは概ね、9時に登園後自由遊び、11時に「お集まり」、12時頃お弁当、その後13時30分の降園の支度まで自由遊びとなっている。（観察を行った日の翌日は、年長児が年少児に自分たちが作ったカレーをふるまうカレーパーティーを行うことになっていたので、お弁当後は自由遊びではなくカレーパーティーの準備を行っていた（写真13参照）。）
- ・4歳児、5歳児のみの2年保育。1学年の定員は140人（35人×4学級）だが、ここ数年は年少・年長とも3学級で推移している。

2. 領域「環境」における物や数量・文字についての取り扱い

幼児の物や数量・文字とのかかわりに関して、幼稚園教育要領の領域「環境」の「内容」と「内容の取り扱い」に以下のように記されている⁵⁾。

内容

- (7) 身近な物や遊具に興味を持ってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- (8) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
- (9) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。

内容の取り扱い

- (1) 幼児が、遊びの中で周囲の環境とかかわり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気付き、自分何に考えることができるようになる過程を大切にすること。特に、他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自ら考えようとする気持ちが育つようにすること。
- (4) 数量や文字などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切に、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること。

『幼稚園教育要領解説』には物との関わりに関して、「幼児が心と体を働かせて物とじっくりとかかわることができるような環境を構成し、対象となるその物に十分にかかわることができるようになることが大切である。」⁶⁾と記されている。また、数量に関しては「知識だけを単に教えるのではなく、生活中で幼児が必要感を感じて数えたり、量を比べたり、様々な立体に触れたりするなど、多様な経験を積み重ねながら数量や図形などに関心をもつようにすることが大切である。」⁷⁾と遊びなどの園生活の中で幼児が数量に興味をもつような環境の必要性が説かれている。文字に関しても「幼児にとって、自分が話している言葉がある特定の文字や標識に対応しているのを知ることは新鮮な驚きである。」「教師はまず幼児が標識や文字との新鮮な出会いを体験出来るよう環境を工夫する必要がある。」⁸⁾と数量と同じように知識として教えるのではなく、園生活の中で幼児の発達に沿った文字や標識との出会いが工夫されるよう求められている。

以下、I市立M幼稚園における領域「環境」の物や数量、文字に関してどのような配慮がなされているのか見ていきたい。

3

3. 物とのかかわり

6月半ばになると年少クラスも園の生活に慣れてきて、仲の良くなった友だちと思い思いにやりたい遊びに取り組んでいる姿が見られた。写真1は年少K組で箱積み木を使って作った車で遊んでいる男児の様子である。保育室内に配置されている箱積み木のコーナー(写真2)



写真1 箱積み木の車



写真2 K組の箱積み木のコーナー

から積み木を運んで、乗り物（車）を作っている。積み木の乗り物作りに取り組むきっかけとなるように、年少各クラスの教師はメーター類を描いた紙も貼り付けたハンドル（写真10参照）をそれぞれ工夫して作成していた。同じようなハンドルを前に置いた車でも、写真1の男児はより本格的に運転席の背もたれや後部座席も作っている。

写真2はK組保育室後部に設けられている箱積み木コーナーである。子どもたちが必要な積み木をすぐに探せるように（片付けやすいように）、積み木の形ごとに置き場をわかりやすく表示しある。

写真3は年少Y組の自由遊び時の保育室内の様子である。木製の仕切りと紙パックを繋げて作った低い仕切りを組み合わせて、製作、ままごとなどのいくつかのコーナーが設けられている。仲の良くなった友だち数人で遊べるように、年少クラスはいずれも仕切りでいくつかの遊びのコーナーを設けていた。（年長クラスは、子どもたちが自分で考えて遊びを展開できるように、特に仕切り使って遊びごとのコーナーは設けていない。）

写真3の手前はレゴブロックやミニカー、動物のミニチュアなどの玩具で遊ぶコーナーになっている（写真4-1）。このコーナーのすぐ横には、それらの玩具を収納する棚が置かれている（写真4-2）。子どもたちが玩具を取り出しやすい（遊んだ後は片付けやすい）ように玩具ごとのケースにも棚にも、何をしまうのか、どこに何のケースをしまうのかを文字と図で示されている。



写真3 年少Y組の自由遊びの様子

年長クラスでは一定のルールに従って遊ぶオセロなどのボードゲームもそろえられている。写真5は年長N組のオセロをしている子どもたちである。しかし、本来のルールに従ってゲームをしているのは、一番奥のボードの子どもたちだけで、手前の2つのボードは石を好きなように並べているだけである。しばらくすると、奥のボードの子どもたちにルールを尋ね、自分たちなりに理解したルールで遊び始めた。初めの



写真4-1 レゴブロック、ミニカーなどのコーナー



写真4-2 レゴブロック、ミニカーなどの収納棚

うちは対戦している子どもたちを真似て石を並べているだけであったが、オセロのルールを友だちから教わり、ルールに従って遊ぶ楽しさを感じ始めているようであった。

写真6は同じ年長N組で積み木をケースに戻そうとしている女兒たちで、最後の一つを入れるスペースがなく、意見を出し合いながらなんとか積み木をしまおうとしていた。下の段から入れ直した結果、すべての積み木をケースにしまうことが出来た。「やったね。」と手をたたき合い、達成感を味わっているようであった。

年長クラスでは写真撮影をした前週に新しい遊びの素材としてビー玉とコードカバーと透明ホースが子どもたちに提供された。これらの素材を使って子どもたちがどのような遊びを始めるのか、教師たちは楽しみにしていた。写真7-1は年長S組の男児たちが新しい素材を使って遊び始めたところである。コードカバーとホースをつないで高いところからビーズを転がそうとしているが、高さが足りず、ホースの途中でビーズが止まってしまうので、



写真5 オセロで遊ぶ子どもたち



写真6 積み木をしまう女兒たち



写真7-1 年長S組のビー玉遊び



写真7-2 年長T組のビー玉遊び

どうしたらホースの最後まで転がすことが出来るのか試行錯誤していた。同時期に同じ素材が提供されても、年長T組の男児たちは自分たちでカバーやホースを持つのではなく、何かで台を作った方がビー玉転がしを楽しめることに気づき、空き箱や机・椅子を利用して高低差のある台を作っていた。また、角度が急なほど勢いよくビー玉が転がることがわかり、台を更に高くするためにどうしたら良いのかを話し合っていた。

4. 数量・文字とのかかわり

年少B組では女兒がアイスクリーム屋さんごっこを始めていた。戦隊遊びをしていた男児たちが興味をもって来店する（写真8-1）。「何のアイスがありますか？」「抹茶といちごとバナナです。」「抹茶といちごを一つずつください。」アイスクリーム屋の女兒たちは茶色い画用紙で作ったコーンに緑とピンクの花紙を丸めたアイスをつまんで「抹茶が一つ、いちごが一つですね。」と言いながら盛り付ける。他の客の2つ、3つという注文にも周りの子と数えながらアイスクリームを作ったり、どのアイスクリームが残り何個か数えて、「あといくつ作る？」などのやりとりが続いていた。ごっこ遊びの中でも数量に関する感覚が培わ



写真8 アイスクリーム屋さんごっこ

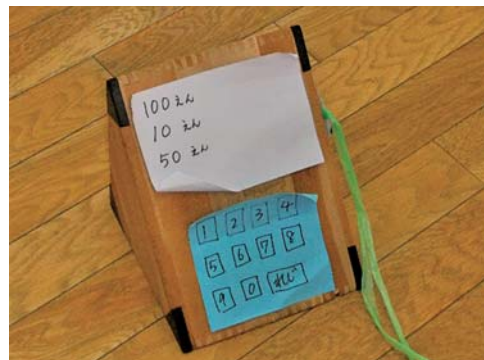


写真9 お店屋さんごっこ用のレジ

れている様子が見える。

また、年少各クラスには写真9のようなお店屋さんごっこ用のレジが用意されていて、子どもたちが数字や小銭の額に関心をもつよう工夫されている。写真10は前述した箱積み木の乗り物用のハンドルである。本物らしくするためにスピードメーターなどが貼られているが、ここでも日常生活の中にある数字を意識することができる。

年少クラスの保育室内にある文字は片付ける場所を表記した「はさみ」「つみき」「どうぶつ」など単語が中心であるが、年長クラスになると文章による表現も多くなる。

写真11は年長クラスの廊下に貼られた朝顔の観察記録である。手前には子どもたちが興味をもって調べられるように図鑑も置かれている。

写真12は年長クラスの黒板には日付の他に集まりの時間を指した時計と実際の時刻を示す時計が掲示されている。チャイムや放送が流れなくても、自分たちで時計を見ながら集まりの時間を意識して、自発的に集まれるようになることを目指しているという。黒板には1週間の予定も貼られているが、より詳しい一日の流れと翌日の予定は、写真13のようにピアノの横のテーブルに掲示されている。

写真14は年長N組のピアノの裏に設けられていた折り紙コーナーである。手裏剣の折り方やその月の折り紙である「かえるのかお」と「かえる」の折り方が、折る過程とともに文章で示されている。

このように年長クラスでは図ばかりでなく、子どもの発達段階に合わせて、子どもたちに無理のない量の文字情報を取り入れる配慮がなされている。



写真10 箱積み木の車のハンドル



写真11 朝顔の観察記録



写真12 黒板の週間予定表と時計



写真13 「きょうのながれ」と「あしたのよてい」



写真14 折り紙コーナー

5. おわりに

自由遊びの時間は、基本的に保育者は保育室内や園庭を行き来しながら、必要に応じて子どもたちに声をかけ、子どもたちの遊ぶ様子を見守っていた。今回取り上げた子どもたちの遊びの活動場面では、いずれも保育者は子どもの様子を見守るのみで子どもたちの主体性に任せていた。

午前の自由遊びの時間という限られた時間内で園舎内のみの観察ではあったが、I 市立M 幼稚園においては子どもたちの主体的な遊びを重視し、遊びや園の日常生活の中で物とのかかわり、数量・文字とのかかわりを深めている様子の一端がうかがわれた。

フラッシュカードやワークブック、書道などの様々な方法で小学校低学年での学びを先取り的に行っている幼稚園も少なくない。物とのかかわり方や数量・文字も知識として教えれば、子どもは教えられたと通りに覚えるであろう。しかし、それは主体的な学びとは言い難い。M幼稚園における保育の取り組みを観察し、園生活の中で様々な物とのかかわり、じっくりと遊び込んでいく中で、子どもたちは多くの学びを自ら得ていくことが出来ることがわかった。生活科が求める「主体的な学習活動」に真に結び付くのは、M幼稚園のような保育のあり方なのではないかと感じた。

引用・参考文献

- 1) 木村吉彦「第5章 生活科の理論と実際」(太田正輝編『子どもの未来を拓く教育の創造』2003) p.122
- 2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 生活編』、2008、p.45
- 3) 文部科学省『小学校学習指導要領』、2008、p.72
- 4) 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領、保育所保育指針』チャイルド本社、2014、p.36
- 5) 同前、pp.37-38
- 6) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館2008、p.128
- 7) 同前、p.129
- 8) 同前、p.130